

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。〕

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月一回の会議で確認し、個々の問題を通して実践に繋げている。	理念は来訪者の目にもふれる様に玄関に掲示し、共有と実践に繋げている。職員は毎月の職員会議で理念の持つ意味を確認して日々の支援に取り組んでいる。家族には入所時に理念に沿った取り組みについて説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	郵便局、商店主、農家など幅広い交流があり、地域との交流は、増えてきている。	開設以来区費を納め、区長との連携を深めている。また、日々のお散歩の際には近隣住民の皆さんと親しく挨拶を交わしている。地域企業や商店等と幅広く交流しており、地域に親しまれる施設として活動している。社会福祉協議会と連携し、「買い物ボランティア」等各種のボランティアとの交流を深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	社会福祉協議会の仕事の手助けや、ボランティア活動を通じて活動している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で話し合いの機会は、減少しているが、ご家族の参加を依頼し、意見を汲みあげている。	運営推進会議は広域連合職員、北部保健福祉サービスセンター長、ご家族代表2名、社会福祉士、ホーム関係者が出席して3ヶ月に1回開催している。利用者状況、行事や事故・ヒヤリハット、避難訓練の実施状況及び地域との連携の報告、意見交換等を行っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	どんなことでも、メールや電話で連絡し、指示を仰いだり情報交換をしている。	市の担当部署には事故・ヒヤリハットの報告等を行うと共に、代表者が必要に応じて訪問し、きめ細かな連携を取ってホームの運営向上に繋げている。北部保健福祉サービスセンターとは入居者紹介等で連携している。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し、管理者とケアマネジャーが対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	具体的な個々の行為を理解しており、お互いに確かめ合っている。	法人の方針として拘束の無い支援に取り組んでいる。転倒危惧のある方が数名いるが、家族と相談の上で、人感センサーを使用している。日中のきめ細かな所在確認及び夜間の2時間に1回の巡視により安全確保に繋げている。併せて毎月8日に身体拘束、虐待防止について話し合うと共に、身体拘束適正化委員会を3ヶ月に1回開いている。拘束に対する意識を高め、日々の支援に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	精神面での虐待が起きないように、特に注意している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度は理解しているが、活動出来るまでには至っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族からの質問や疑問点を中心に、話し合いを行い納得いくまで説明している。改正等は、早めの連絡と説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	各種説明会懇談会を通じて意見交換をしている。	家族の面会は、現在、事前に連絡を頂いた上で、玄関にイスとテーブルを用意して、短時間で人数2～3名で行っている。ホームでの生活の様子は毎月発行の「すずらん通信」に利用者の写真を添えて、請求書に同封して届けている。併せて代表者、管理者、ケアマネージャーがきめ細かく電話等で家族と連絡を取り、利用者の様子を知らせている。更に、行事等での利用者の写真が個人別アルバムとして玄関脇に置かれている。家族は面会時等に閲覧している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月一回の会議で、意見や要望を確認している。	毎月8日の職員会議で利用者個々の状況確認、各種勉強会を行っている。併せて社長、管理者との個人面談を行っており、職員が意見を述べる機会となっている。また、法人としてキャリアアップ制度があり、職員の資格取得に力を入れている。介護福祉士、ケアマネージャー資格取得研修会等の費用補助を法人が行っており、職員個々のスキルアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	キャリアパス制度を中心に、より良い職場環境になるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	小規模な職場なのでよく把握している。また、研修等は金銭面、労働面、積極的に支援している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	交流会等は 大いにすべきと感じているが、閉鎖的な面も多い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	認知症高齢者なので、中々本音は聞けないが、まず、不安をとりのぞくことを優先させている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	じっくり時間を掛けて聞き、必要とあれば何回でも話し合いの機会を設ける。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	現在出ている症状に応じて対処し、必要があれば他の施設も紹介している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	親しき中にも礼儀ありの精神を基に、人間関係を築く努力を重ねている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との連絡が途絶えないよう、日々の写真や提供手紙の交換など家族を蚊帳の外に置かないよう心掛けています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で、遮断されている傾向がある。	コロナ禍中は家族以外の面会は自粛していたが、現在は家族の了解がある友人等の面会がある。訪問美容師が2～3ヶ月に1回来訪し、カットを行っている。利用者の笑顔が入った「暑中見舞い」と「年賀状」を出しており、家族に喜ばれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	全員参加の機会多く、お互いが助け合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	「次は私が入るから、いい人いたら、紹介するね」等、うれしいことを言ってくれたり長い付き合いの家族もふえている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の思いや、ちょっとした話の中から意向の確認を行っている。	職員の問い掛けに対して意思表示の難しい方が数名いるが、表情や仕草より希望を受け止めている。他の方は飲み物や洋服選び等の二者択一の提案も含めて意向に沿えるような支援に繋げている。日々の支援の中で気付いた事柄は介護記録に纏めて記入すると共に、職員で情報を共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族との話の中や訪ねてきた友達から情報の収集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々よく観察し食事の手伝いをしてもらったり、洗濯物の取り込み等他の入居者さんの面倒を見てもらっている。その日の体力に応じ、個々人を見守っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員会議、担当者会議、運営推進会議を活用し、出来るだけ家族の出席を求め、現状に合った介護計画を作成している。	職員全員で利用者一人ひとりの状況把握に努めている。入所時や面会時、電話等でお聞きしている家族の希望も加味しながら、更新時に意見を出し合ってモニタリングを行い、管理者とケアマネジャーがケアプランを作成している。入所時は1カ月位様子を見て情報を共有している。個々の状況に合わせて短期目標2～3ヶ月を作成し、状態が安定している場合は1年で見直している。状態に変化が見られる時には適宜見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	朝夕の引継ぎ、個別記録を通して情報の共有を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホーム協会資料等、最新の情報収集に努め柔軟な対応に心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域支援の開発に努めているが、楽しい生活ができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月1回の往診、家族が必要に応じて医師との話し合いができるような体制を作っている。	利用契約時に医療機関の状況をお聞きし、ホームの取り組みを説明している。現在は全利用者がホーム協力医の月1回の往診で対応している。非常勤看護師が1名在籍しており利用者の健康管理を行うと共に、医師との連携を図っている。専門医の受診は職員が付き添っている。歯科は協力歯科医の月1回の往診に合わせ、ホーム在籍の歯科衛生士が口腔ケアも含めて、健康維持に取り組んでいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	内部的には准看護師が当たり、協力医の正看護師が把握して医師が対応に当たっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医師の情報とケースワーカーの情報に、齟齬が生じることが多く、対応に苦慮することが多い。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現段階では、終末期意向確認書にて対応。重度化や、終末期の指針等主治医と検討中である。	重度化、終末期を迎えた際の指針があり、利用契約時に説明して同意書を頂いている。終末期を迎えた時には家族の意向を確認の上で、家族、医師、看護師、ホーム関係者で話し合いの場を設けている。医師の指示の下、改めて看取り同意書にサインを頂いて、医療行為を必要としない看取り支援に取り組んでいる。1年以内に数名の看取りを行った。居室に花と写真を飾り職員はきめ細かく顔出しと声掛けを行う等、心の籠った看取りを心掛けている。また、家族には最期の時を居室にて過ごして頂いている。職員会議で勉強会を行って、看取りに対する心構えを学んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルに沿って、勉強会を開いている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	自然災害発生時避難業務計画に基づき勉強会等行っている。地域との協力体制の見直しを行う。	消防署へ届け出た上で、年2回防災訓練を実施している。5月は避難経路確認のため、利用者全員を外へ移動しての訓練を行い、避難時間の確認を行った。10月は火災を想定しての消火訓練及び防災機器の点検を行うと共に近隣河川の増水を想定した水防訓練を行った。緊急連絡網の確認訓練を定期的に行っている。「お米」「水」「レトルト食品」「介護用品」等を1週間分備蓄しており、「カセットコンロ」等を準備している。	

自己 外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援				
36	(14) ○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の意向に沿って優しい言葉で対応し否定的な態度や馴れ合い的な言葉に気を付け、本人のプライバシー保護に努めている。	利用者一人ひとりと関わる中で優しく寄り添い、親しみを込めて丁寧に話し掛けるように心掛けてい る。呼びかけは、名前を「さん」付けで呼びし、 入室の際には「ノック」と「声掛け」を徹底してい る。また、年2回、代表者が講師となりプライバ シー保護に関する勉強会を行っている。	
37	○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自 己決定できるように働きかけている	認知症入居者については、なかなか難しい ことであるが、ちょっとした会話や本人の想 いを、見落とさないよう心がけている。		
38	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一 人ひとりのペースを大切に、その日をどのように 過ごしたいか、希望にそって支援している	グループホームの一日は、何らかの時間制 限がなく、本人の希望に寄り添っていける一 日がある。		
39	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように 支援している	定期的に美容師が来訪し、介護職で対応で きることはその都度手助けしている。		
40	(15) ○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好 みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準 備や食事、片付けをしている	3食手作りで、利用者の参加が多い。	介助が必要な方が若干名いるが、殆どの方が自 分で食事が出来る状況である。調理専門職員2名 が旬の物を手作りで温かいうちに提供している。 利用者は力量に合わせて「盛り付け」「テーブル拭 き」等を手伝っている。また、行事食として、正月 には「昆布巻き、伊達巻」等のお節料理、雛祭り には「ちらし寿司」、お彼岸には「おはぎ」等を提供 している。	
41	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて 確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に 応じた支援をしている	栄養バランスには、特に心がけている。 日々よく観察し入居者の習慣等は、全職員 が把握している。		
42	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一 人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケ アをしている	3食後毎回行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレでの排泄に心がけている。	排泄は自力の方が数名、全介助の方が若干名、一部介助の四分の三強の状況である。全利用者がリハビリパンツとパットを使用しており、トイレでの排泄を心掛けている。職員は全利用者のパターンを把握しており、介護日誌の中の排泄表も参考にして、起床時、食事前、就寝前の定時の声掛けの他にも様子を見ながら早めにお誘いしている。お茶、ジュース、スポーツドリンク等で1日1000cc以上の水分摂取に取り組み、排便促進に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	特に運動量の確保を心がけている。コロナ禍での運動量の減少が見られるため。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	指定日以外、臨機応変に対応。	見守り自立の方が数名、全介助の方が若干名、一部介助の方が四分の三強の状況である。2人同時に入浴可能な広い浴槽で基本的に週2回の入浴を行っている。入浴後には希望でリングジュース、ブドウジュース等を飲んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間熟睡を基本に、昼間の対応をこころがけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	症状の変化に応じ家族と相談の上対処し、薬の内容については理解している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	過去の生活歴に合わせて、日常支援をおこなっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で中止することが多い。5類移行後、正確な情報が少ない。	外出時は自力(見守り手引き)が五分の三強、歩行器使用と車いす使用の方が数名の状況である。天気の良いはホームの周りや敷地内を散歩したり、中庭でお茶を飲みながら外気浴を楽しんでいる。また、食材の買い出しに同行したり、近くの喫茶店にケーキを食べに出掛ける方もいる。コロナ禍以降は外出レクリエーションを行う機会が少なくなっているが、今年は感染状況を見ながら、ドライブを兼ねた花見にも出掛けたいと考えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	預り金は、ホームが管理。少額なら何時でも使用可能で、本人にも説明している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	職員と一緒に手紙を書いたり、家族からも頻りに手紙が届く。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	天窓からの光と、新鮮な空気、大きな窓からは、四季を感じられ気になる匂いは、一切ない。	玄関を入ると数々の人形、ぬいぐるみ、観葉植物等が迎えてくれる。また、利用者一人ひとりの生活記録である「アルバム」が閲覧できる様になっている。各ユニット内には幅3メートル長さ30メートル強の廊下がある。毎日歩行訓練を行うと共に、運動会の会場にもなっている。各ユニットを挟むように広い中庭があり、ベンチに腰掛けて外気浴を楽しんだり、季節の花々を楽しむスペースとなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳コーナー、ウッドデッキ、中庭、ベンチ、などでゆっくりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたものや趣味の用品を、家族に持参してくれるようお願いしている。	居室入口にはケアマネージャー手作りの「表札」が掛けられている。十分な広さが確保された居室は洗面台と大きなクローゼットが完備されている。家族と相談の上で、使い慣れた家具等を自由に持ち込んでいる。趣味の人形、ご自分の作品、家族の写真等に囲まれて自由な生活を送っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	分かりやすい案内板等により自立の手助けをしている。		